

文学、哲学から物理学や精神医学にいたる豊饒な学識、坂口安吾や丸山真男、E・フロム、ハンナ・アーレント、エリック・ホフファーからD・リースマン、スタンレー・ホフマンにいたる知的系譜、研ぎ澄まされた文章と挑発的なレトリック、まさにわが国二十世紀知識人の最も優れた到達点を示し続けた国



際政治学の永井陽之助氏は、昨年末に逝去されていた。大きな喪失である。

私個人にとっても永井先生はかけがえのない存在であった。私の著書を引用されたからと名著『平和の代償』(中央公論社)を署名入りで贈ってくださったのが一九六七年初頭だったので、もう四〇年以上も前のことにな

永井陽之助氏をしのぶ

中嶋嶺雄

る。同書は、氏が在米中に出会った一九六二年のキューバ危機に強い衝撃を受け、朝鮮戦争からベトナム戦争までを見据えて、核時代の日本外交の拘束と選択の有様を示した力作であった。平和論過剰のわが国の言論界にいわば現実主義の立場から切り込んだ挑戦である。

私が永井氏に最初にお会いしたのは、一九六七年春、日米知識人会議への出席を松本重治氏

は私が最年少かつ最初の訪米だったので、会議の後に永井氏とワシントンDCやハーバード大学へ一緒に過ごさせていただいた。中国の文化大革命の余波は、まもなくわが国の大学紛争へと連なっていた。東大の安田講堂落城が目されたけれど、実は東京教育大と東京外大の紛争も深刻で、やがて東京工業大への波及していった。私は東外大の教授会代表委員として過激派

トナム戦争に当てはめて論じた『時間の政治学』がある。こうした旺盛な言論活動のなかでの学術的貢献が、永井直查による文部省科学研究費特定研究「国際環境の基礎的研究」であった。この共同研究は、国際的な冷戦研究として注目を集め、京都シンポジウムには世界第二線の学者が集まった。その成果が英文ではコロンビア大学出版会から出され、わが国では

平和論に切り込んだ現実主義者

から要請された、国際文化会館での準備会のときであった。ウイリアムズバーグで開かれたこの会議は、日本側が笠信太郎、桑原武夫、永井道雄、加藤周一、坂本義和の各氏ら、米側がD・リースマン、E・ライシャワー、ダニエル・ベル、スタンレー・ホフマン、R・スカラピーノ各氏らの錚々たる面々で、中国の文化大革命とベトナム戦争がテーマであった。この会議で

学生と対決せざるを得なかったが、永井氏も東工大で人社系を代表する立場にあり、私の東大での経験を東工大で講演したこともあった。この学園紛争を国際的視野で論じた書が『柔構造社会と暴力』(中公叢書)である。同じ中公叢書にはキッシンジャー外交や日中友好外交を批判的に論じた『多極世界の構造』、政治的資源としての「時間」を「非対称紛争」としてのべ

永井著『冷戦の起源』などの「叢書 国際環境」(中央公論社)となり、永井氏は日本国際政治学会理事長にも就任された。当初は現実主義の立場から理想主義者の平和・安全保障論を鋭く批判した永井氏だったが、言論や政治に軍事優先傾向が強まるなかで氏は、主に岡崎久彦氏との論戦を意識して防衛論を『文藝春秋』に一年間連載、八四年度文春読者賞を得ている。

永井氏の一九八五年の東工大最終講義を巻頭にした『二十世紀の遺産』(文藝春秋)は、粕谷一希氏と私もお手伝いした浩瀚な編著であり、氏の人脈の広さを物語っている。そこに登場する高坂正堯氏も江藤淳氏もすでに亡く、神谷不二氏もつい最近永井氏の後を追って急逝された。これらの方々には、佐藤栄作政権の時代以降、首席秘書官・楠田實氏のもとで日中関係や日米関係の方策を永井氏とともに提言した論客でもあった。永井氏が論じた軽武装・日米同盟重視の「吉田ドクトリンは永遠なれ」との見解が一部で誤読されてもいる昨今だけに、氏の一貫した警告を忘れてはなるまい。なお永井氏は毎日新聞社アジア調査会アジア研究委員会の代表幹事としても貢献された。(なかじま・みねお)国際教養大学長



国際政治学者、永井陽之助氏は昨年12月30日死去。84歳。